

## 委員からの提出意見

### <佐久間 一郎 委員>

#### ■規制との関連について

- ✓ 標準化, 特に安全に関する標準化は規制との関連が大きい。医療機器分野においては医療機器承認との関連で国際標準が参照されることがある。医療機器のサイバーセキュリティ, 機械学習を応用した医療機器の分野などにおいては, これを活用して非関税障壁を設ける動きなども見受けられる。このような各国の動向分析しつつ, 自由な貿易を維持しつつ, 国益を守るという観点での均衡のとれた規制政策の立案が重要となる。

#### ■国際標準化につながる関連活動との連携について

- ✓ サービスロボットの標準化実績が JQA からの報告で言及されていたが, 日本ロボット工業会でパーソナルロボットの安全に関して, 産業界とアカデミアでの研究会を開催しており, そのレポートが下地になっている。そのような標準化につながる活動を着実かつ継続的に行う必要あると考えられる。
- ✓ 医療機器分野では, 次世代医療機器・再生医療等製品評価指標作成事業という事業が厚生労働省により経済産業省との連携のもと実施されている。例えば医療用ロボットの自動化レベルについて Science Robotics の論文 (Yang, Guang-Zhong et al.: Medical robotics—Regulatory, ethical, and legal considerations for increasing levels of autonomy, Science Robotics, 2470-9476, 21017) が広く引用され, ISO/IEC における Level of autonomy の議論につながっているが, 同様の議論は上記 次世代医療機器・再生医療等製品評価指標作成事業の平成 19 年度報告書 ([https://dmd.nihs.go.jp/jisedai/navi\\_2/navi2\\_19\\_1.pdf](https://dmd.nihs.go.jp/jisedai/navi_2/navi2_19_1.pdf)) の Annex A にすでに記述されており, 関連する活動の国際標準化関係者との共有促進が求められる。

#### ■大学における人材育成について

- ✓ 論点 2・3 の特に大学における標準人材の育成やキャリアプランは, 方向性は分かるが, その実現は難しい。アカデミアにおける標準人材の課題がこのような形で議論されること自体は良いことであるが, 現状では標準化活動は大学において評価されるわけではなく, 次の世代をどう育てるのが課題である。長期的な視点で, 人も予算もかけてやる覚悟を持たないと動かない。大学の現状を考えると, 基盤的予算(運営費交付金)を増額し, このような教育研究領域に参加する人材やポストを増やしないと根本解決にならない。
- ✓ 大学における定常的な教育研究活動組織の実現に, 産業界から資金援助による, 社会連携講座・寄付講座を設けるというアプローチも考えられる。ただしこのような支出に対

する株主への責任をどのように説明するのが課題である。例えば企業にとっても、標準化活動は短期的に利益に直結するものではないが、安全や健康、防災、安全保障と同じように、企業活動に対するリスクとして株主に説明できるようにすればよいかと思われる。また、その際には諸外国が動いていることを示しつつ、今このような投資を大学に行うことが中長期的な企業利益につながることを、政策として支援することも一案である。

#### <吉高 まり 委員>

- ✓ 官民連携について、この国際標準に限った話ではないが、日本企業は最終的には「官」に依拠する意識がまだまだ高いのではないか。欧米においては non-state（非国家）のステークホルダーがソフトローのイニシアティブを起こすのが主流となっている。「官民連携といっても最後は「官」がやってくれば良い。やってくれるに違いない。」というような意識・認識を、人材育成の観点から、どのように変えていくべきかといえば、論点 2・3 の施策 A「経済界、学術界、金融界への働きかけ」と施策 B「企業・研究機関の視座シフト」を徹底的にやることが重要であろう。この施策 A と B の認識が低ければ、例えば、施策 C「人材育成システム強化」や施策 D「外部専門機関の育成・強化」をいくら頑張っても、結局、持続可能ではないと考える。本来は、全部必要だとは思いますが、持続可能性という点では、施策 A と B にウェイトを置くべきではないか。
  
- ✓ 他国からの提案をブロックするテーマと、新規市場を作るテーマは分けて考える必要があるのではないか。新規市場を作り利益を獲得するというアップサイドリスクのある国際標準と、ブロックしておかないと損失に繋がるというダウンサイドリスクのある国際標準があるが、日本にとっての重要領域はどちらかといえば、アップサイドリスクの方ではないかと思う。ダウンサイドリスクのある国際標準とアップサイドリスクのある国際標準について、それぞれの重要課題を整理しておく、フォローアップやモニタリングに活用できるのではないか。人材の質も変わってくる。また、何にどう予算をつけていくべきかを考えるときにも、ダウンサイドリスクの場合とアップサイドリスクの場合で、今回の論点 2～6 を整理することも重要であると思料する。

以上